

ちょっと読んでみませんか（令和六年正月）

第71話『令和六年 今年の言葉』 〓 本源寺副住職 本間健司

毎年、年末に「今年の漢字」が発表されるのは皆さんご存知ですよね。

日本漢字能力検定協会が、一般の方から今年の世相を象徴する漢字を募集し、最も得票を集めた漢字一字を「今年の漢字」として選定します。京都清水寺の貫主（かんす）様が真っ白の大きな紙に揮毫される様子は、年末の風物詩ともなっていますよね。

それでは、令和五年末に選ばれた「今年の漢字」を皆さんは御存知ですか。それは、税金の「税」でした。

現在の政権が、増税や減税など税政策をコロコロと変え、それによって国民は惑わされ、一体国はどの方向へ進もうとしているのか…。そんな国民の不安な想いが、この「税」という一字に表現されたのでしょうか。

ちなみに、得票の二位以下は次のような漢字でした。

二位「暑」、三位「戦」、四位「虎」、五位「勝」、六位「球」

一位から三位に良くない出来事（マイナス）、そして二位から六位に楽しい出来事（プラス）を象徴する漢字が並んでいます。

嬉しさや楽しさの盛り上がりは短期間のうちに忘れてしまい易いものに対して、不安や辛さの感情は心の中で尾を引いてしまうという私たち人間の心の特性に合致する結果となっています。

そして年が明けると、今年（こそ）は良い一年位なりますように、と誰もが願ってしまふものではないでしょうか。

大正から昭和期にかけて「国民教育の父」と呼ばれ多くの方から仰がれた森信三氏（哲学者・教育者）の講義録のなかに次のような言葉があります。

物事にはすべて表と裏があるのです。言い換えれば日向と日陰とがあるわけです。自分が不幸と考えた事柄の中にも、そこには人の世の深い教訓のこもっていたことが次第に分かつてくるという場合も少なくないでしょう。

ところが我々人間は、自分が順調に日を送っている間は、とかく調子に乗って人の情とか他人の苦しみなどということには気付きにくいものです。順調ということは、表面上からはいかにも結構なようですが、実はそれだけ人間が“おめでたく”なりつつある

わけです。表面のプラスに対して裏面にはちゃんとマイナスがくっついている。

いっぽう表面がマイナスであれば、裏面には必ずプラスがついているはず。ただ悲しいことに、我々は自分でそうとはなかなか気づかないで、表面のマイナスばかりに気を取られがちなのであります。

表面、事なきものは得意になって自ら失いつつあることに気づかず、表面不幸なものは、その底に深き真実を与えられつつあることに気づかないで嘆き悲しみ、果ては自暴自棄にもなるのです。

森先生は人間の“心の傾向”を鋭く洞察し、仏教にも精通されていた先生らしく次のような「より良く生きる心構え」を示されています。

この大宇宙の根本的な統一力であり、宇宙に内在している根本的な生命力を人格的に考えた時、これを神(仏)と呼ぶわけです。

我が身に降りかかる一切の出来事は、実は、この大宇宙の秩序がそのように運行するがゆえに、内在する我々に対しても起きるのである。

つまり、我が身の上起こる事柄は、そのすべてがこの私にとって絶対「必然」であるとともに、またこの私にとっては「最善」なはずだというわけです。それゆえ、我々はそれに対して一切これを拒まず、一切これを退けず、素直にその一切を受け入れて、そこに隠されている神(仏)の意思を読み取らねばならぬわけです。

この考え方、またこの真理は、私たちが読むお経である『妙法蓮華経 如来寿量品 第十六』の中で、お釈迦様が説かれる次の教えとも合致しています。

諸々の生きとし生ける者は、各々に、様々な性質性格を持ち、様々な欲望を持ち、様々な行いをし、様々な想いを心に抱き、様々な思慮分別によって生きていくがゆえに、久遠の御仏は、我々に悟りへの気付き(善根)を得さしめようと、様々な言葉や手段を用いて教えを説き、導くのである。

その導きは、遙か遠い過去から始まり、限りなき未来に至るまで、決して尽きることの無い永遠のものなのです。

「生老病死」に代表されるように、私たち人間は、常に様々な苦しみや悲しみと同居しています。また同時に、苦しみや辛さを乗り越える智慧を生み出し、伝承してきたのも私たちが人間の歴史ではないでしょうか。

「冬来たりなば春遠からじ」
「禍(わざわい)を転じて福と為す」

ということわざもあるように、苦しみや災い(禍)を耐え忍び、受け入れ、またその事実から新たな気付きを得た時に、一步成長した新たな未来が開けるんだ、という智慧を生み出せたのも、その根底には日本人ならではの、神さま仏さまご先祖様への深い信頼・信心があったからでしょう。

「きつと守っていてくれるはず」「きつと自分に必要な導きに違いない」
私自身も、そんな信心・“感覚”に何度も助けられてきました。

さきほどの森先生は、そのような“神仏とつながっているという感覚”・物事の捉え方を

最善観(さいぜんかん)

と名付けられました。

日本人ならではの深い智慧が込められたこの言葉を、令和六年の言葉とし、困難な時代を乗り越えるための旗印としたいと思います。

それでは、檀信徒皆々様の心身健全と、令和六年末の「今年の漢字」に希望を感じる言葉が選ばれるような一年になることを御祈念申し上げながら…合掌

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經